

आयुस्、あーゆす

〈発行〉 京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市横島町千足80

蚊と人間の闘争から見る世界史

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長

総合社会学部・教授（植民地主義・帝国研究）

遠藤

央

ティモシー・ワインガード著（大津祥子訳）『蚊が歴史をつくった—世界史で暗躍する人類最大の敵』 青土社 2023

新聞にも書評が掲載された、今話題の本を紹介したい。19章からなる浩瀚なものなので、読んで興味深かった点を簡単に書いていく。

「はじめに」の最初で、「蚊が出没しない地域は南極大陸、アイスランド、セーシェル諸島、仏領ポリネシアの小さな島々のごく一部のみである」と指摘されている。蚊は地球の大部分に生息しているということである。

7章は有名な「コロンブス交換 蚊とグローバル・ヴィレッジ」と題されている。旧大陸と新大陸の間での病原菌、食物、人間などの相互移動のことであるが、マラリア媒介蚊の群れが「ヨーロッパからの最初の船に乗り、これまで手付かずだったアメリカ大陸に到着した。この船の舵をとっていたのが、…コロンブスである。…コロンブス交換が始まると、新世界のハマダラカと、アフリカやヨーロッパから入ってきたハマダラカとヤブカはどちらもアメリカ大陸における蚊媒介感染症の原因となった。アメリカ大陸原産のハマダラカは元々無害だったが、すぐさまマラリア媒介蚊となったのだ」（177頁～180頁）。

「1492年にコロンブスによって弾みがついた、いわゆる探検あるいは帝国主義の時代には、天然痘や結核、麻疹、インフルエンザ、そしてもちろん蚊媒介感染症が全盛を誇っていた。こうした病気は、全員ではないものの多くのヨーロッパ人が免疫を持っていたため、侵略者たちがアメリカ大陸を含めた世界の大半の地域を征服して植民地化

することを可能にした」（182頁）。すなわち、植民地化には、蚊が重要な役割を果たしたのである。

「コロンブスは2回目の航海中の1494年に、人獣共通感染症の動物の宿主である馬、牛、豚、ニワトリ、ヤギ、羊を新世界に持ちこんだ。タバコやトウモロコシ、トマト、綿花、ココア、ジャガイモが住み慣れたアメリカ大陸から世界中の肥沃な畑へと追い立てられた一方で、リンゴや小麦、サトウキビ、コーヒー、そしてさまざまな青野菜はアメリカ大陸で栽培の場が用意されていた」（194頁）。このように「コロンブス交換」は、現在の地球のあり方を定めたのである。

16章はそのものずばり「蚊の正体を暴く 疾病と帝国主義」である。「南北戦争後に米国のインフラと貿易が発展するにつれて、蚊媒介感染症も増加した。…蚊はこの過程で米国の貿易業者と投資家の銀行口座も食い荒らした。蚊が人と利益の両方を最も奪っていたのは、米西戦争の勃発前の時期だった」（427頁）。「このような帝国による世界的な争奪戦の最終段階において、蚊はついに正体を現した。このきわめて凶悪で人目を忍ぶ諜報員は、フィラリア症やマラリア、黄熱などの暗殺手段を有していたが、ようやくその姿を現すことになる」（430頁）。

「おわりに」では「昨年、蚊に殺害された数はわずか83万人だが、依然として人間同士による虐殺をはるかに超えている」（544頁）と指摘されている。蚊との戦いはこれからも続くのである。以上からわかるように、蚊の視線から見ると、世界史をきわめて深く理解できるのである。

（えんどう ひさし）

✿✿ 保育者人生の節目で出会った書物たち ✿✿

幼児教育学科・講師（人間福祉学、公共政策学、保育学） 三島千明

私の人生の節目に出会った最初の書物は、養成校の授業の教材『涙より美しいもの～大津方式にみる障害児の発達～』稲沢潤子著（大月書店 1981）である。保育士としていかに働くかを定める節目で私の保育者人生を方向づけ、その後40年間、保育への情熱の熱源となった。実際に障害児保育に携わると数えきれない戸惑いや困難に出会ったが、その度に、先輩や同僚、上司といった保育仲間を支えられ、共に保育を創っていく支え・育ちあえる仲間がいかに大切かを体得してきた。そうした仲間が必要なのは、障害児だけでなく、どの子どもにも必要であり、障害児保育の理念は、一人一人を大切に作る保育や育ち合い保育に繋がっていることを実践的にも理解した。

私は1982年に保育士となった。先輩保育士は、緊張感のない私に「子どもにとってベテランも新人もありません。」と言い放ち、その言葉に啞然とする私に「保護者にとって担任保育者のはずれくじを引いたと言われぬように、一緒にがんばろう」と続けた。その言葉が妙に忘れられず、定年退職を迎える日まで、保護者から信頼を得られる豊かな保育を仲間と共に創り出すことを課題としてきた。初めて担当したクラスは4歳児。保育者が設定保育を進め、子ども達に様々な経験をさせる先輩保育者の様な保育ができず、子ども達の仲間に入れてもらって一緒に遊び、あそびの材料を提供する黒子の役割がやっとだった。その時期に出会った書物が、『フレーベル新書10 幼稚園真諦』倉橋惣三著（フレーベル館 1976）である。養成校で学んだ「倉橋惣三」という名を図書館の書棚に見つけ、自身の保育方法に新たな活路を見出したい思いから手にした一冊だった。倉橋が講演会で話した内容が綴られ、新人保育士には読み易かった。そこには、一斉保育型保育からの脱却、子どもが実現したい思いに気づきその背中を押す役割こそが保育者の仕事、保育者が用意する環境の中に子ども達に経験してほしい種を隠し、子どもがその種を見つけて育てるうちに子ども自身が育っていく等の内容が書かれており、私が目指し

てきた保育をその中に確信した。子どもとその生活を保育の中心におく、倉橋が確立した「児童中心思想の保育」である。保育者が子どもを遊ばせるのではなく、子どもが遊んでいる所へ保育者が赴き、環境を整え、準備した環境に経験してほしい内容に繋がる教材を仕込む、いわゆる現代保育が当然とする「環境を通して行われる保育」そのものである。この書物に続き、保育士としての混乱期に影響を受けた書物が、『エミール (Émile)』である。それは、全国から保育者が集まる研修会の講演でJ・J・ルソーの教育論『エミール』を紐解きながらご自身の教育論を熱弁する秋葉英則教授（大阪教育大学）との出会いでもあった。その著書『J・J・ルソー エミール200年の旅』秋葉英則著（清風堂書店 1987）に感化され、いつか自身で読みたいと挑戦したのが、『エミール（上・中・下）』ジャン・ジャック・ルソー著/今野一雄訳（岩波文庫 1962）である。子どもの可能性に気づき、その可能性を真に開花するのは教育の力によること、その教育は、発達に応じた発達に必要な教育でなければならないこと、どんな大人に育てるのかということを含む子ども観等、多くを学んだ。これを機に「ひとりみんなのために、みんなはひとりのために」が私の保育観の根っことなり、障害のある子どもが健常児集団の中で仲間のひとりとして受け入れられて育ち、健常児も障害のある子どもとの出会いで育っていく、「共に育ち合う保育」に益々打ち込んでいった。保育者人生でぶつかる困難や課題を克服したいとものがく時、未来をイメージさせてくれる書物との出会いが必ずあった。何十万冊もあるだろう図書館の書棚から私が手にしたい書物に出会い、その中で手放したくないと思う書物を購入する。忘れたくない言葉や文章にはラインを引きたくなる。何度も繰り返し読みたくなる。迷った時に何度も手にしてページをめくる。そうした愛読書がわが家の本棚に大切に並べられている。

（みしま ちあき）

🌸🌸 こころの世界と児童文学 🌸🌸

臨床心理学部・講師（臨床心理学） 長谷川 千 紘

幼い頃から物語を読むことが好きだった。周囲に本好きが揃っていたこともあり、わくわくするようなたくさんの物語に囲まれて子ども時代を過ごせたことは、今から振り返っても、幸せなことだったと思う。子どもだった私は、本のページをめくると、日常を遠く離れた世界に入り込んでいった。頑なだった少女メアリーのこころが春を迎えるバラ園とともに花開く『秘密の花園』、真夜中に自分にだけ開かれる庭が出現する『トムは真夜中の庭で』、美しくも恐ろしくもある真実の時間を見た『モモ』…など、今もなお心に残る物語がたくさんある。このような児童文学を読んでいるとき、体は日常の世界にありながら、こころは物語のなかに、そしてその登場人物とともにあるような体験をしていたのだと思う。

臨床心理学を学び、心理療法にたずさわることになって、こころというものが驚くほどの深みをもって私たちの前に立ち現れてくることを知った。特に子どもたちというのは、その自由で豊かなイマジネーションをもって、こころの世界の多様なあり方を私たちに示してくれる存在である。臨床心理学者の河合隼雄は、たくさんの児童文学を読み、そして児童文学に関するたくさんの著作を残している。河合は、児童文学には「子どもの

目」から見た世界が描かれていることを述べる。大人たちが、あまりにも単層的できまりきったものの見方にとらわれるとき、「子どもたちの目は、大人の見るとは異なった真実」（河合、1994）を見る、というのである。児童文学のなかで登場人物とともに体験される世界は、プレイセラピーにおいて、子どものこころが描き出し、子どもとともにセラピストが体験するファンタジーの世界そのものであるように感じられる。

人間のこころの深みを探究したJung, C.G. (CW6, §78) は、「こころは日々現実をつくりだす、この活動はファンタジーと言い表すほかない」と述べている。物語を読むことと心理療法は、こころの現実に出会うという意味で、深いところでは同じ水脈につながっている。こころの専門家を目指す人も、そうではない人も、ぜひたくさんの物語に出会ってほしいと思う。それは、自分のこころに、またその深みに出会う体験になるのではないだろうか。

Jung, C. G. (1971) . The Collected Works of C.G. Jung 6. Princeton University Press. Princeton.

河合隼雄 (1994) . 河合隼雄著作集4 児童文学の世界. 岩波書店.

(はせがわ ちひろ)

🌸🌸 「変わる」勇氣 🌸🌸

臨床心理学部 臨床心理学科 子ども・青年心理コース1回生 掛川 陽 翔

私たちは日々煩わしい悩みが絶えない複雑で混沌とした社会に生きている。学校や会社に行けば、面倒な上司や先輩、先生そして友達付き合いに絡まれ、家に帰っても、明日は誰にからまれるだろう、どんなに嫌な未来が待ち受けているだろうと、面倒ごとからどう逃れるかばかり考えて、不快な心に自己を苦しめられながら、誰もが自分のことだけを考えて生きている。それが今の世の中というものだろう。しかし、そんな面倒でつま

らない世の中が、たった1冊の本によってシンプルな姿を取り戻し、だれもが今日からでも幸せになる、と言われたらどう思うだろう。いささか胡散臭い話に聞こえるかもしれないが。僕はこれは本当だと確信している。これは僕がある本に出合って、今までつまらなく生きていた自分を変えるきっかけをちょっとだけつかんだ話だ。

「君はこの本を読んだ方がいいね。」何となく悩みの霧から抜け出せなかった自分が高校生の時に

勉強していた場所は、とある学習塾。そんなとき校舎長の先生からそう言って手渡された本。それが「嫌われる勇氣」岸見一郎／古賀史健著（ダイヤモンド社 2013）だった。この1冊を2年生のうちに何回か読んだが、今になってからこの本の本質的な理解ようやく到達し始めているといったところである。それくらいこの本の内容を自分のものにするのは容易ではないが、できるようになると人生は劇的に幸せになるだろうと確信して、毎日この理想の実現を大切に丁寧な生き方を欠かさず続けている。

「嫌われる勇氣」は、アドラー心理学の教えをもとに、「誰もが今日からでも幸せになれる」と説く哲学者である「哲人」のもとに、悩みが絶えずひねくれものの「青年」が「誰もが幸せになれるわけがない！きれいごとなんて全部論破してやる!!」といった様子で議論を持ちかけるというストーリーだ。

今回はこの話の中でも特に印象に残っている、人生を劇的に変えてくれる重要な場面を紹介しよう。この話に登場する青年はこういう。「自分には欠点しかないから自分のことが好きになりたくてもなれない」と。これに対して哲人はこういう。「あなたは欠点しか見つからないから自分のことが嫌いになるのではありません。自分のことを好きにならないでおこうという目的が先にあって、それになかった欠点を後から見つけ出しているのです。」と。私たちは一般的にこの青年のように、自分に何か問題がある時、過去にさかのぼってその原因を考えようとする。しかしこの方法では問題は一向に解決しないのだと哲人はいう。「アドラー心理学では、過去の「原因」ではなく、今の「目的」を考えます。あなたが自分のことを嫌いなままでいる理由は、あなたに人と関わることで傷つきたくないという目的が心の中に隠されているからです。」この哲人の主張は、自分にも当てはまる趣旨があると思った。

僕が他人とむやみに関わると大抵の場合は「自分のことしか考えていない自己中なやつだ」とか「独り言がうるさい」とか言って周りのあらゆる人から咎められ、トラブルばかり起こすのがいつものことだから、他人からさげられてばかりだった。そんなことが続いたら人と関わりたくないと思ってしまうのは当然なのかもしれない。しかし、そのような人が必ずしも人と関わりあお

うとする努力を止めてしまうのだろうか。断じて違う。そんなきっかけから他人と仲良くなりたいたいという「目的」を持つようになる人は、そんな自分を変えたいと反骨心を力に自分を変える一歩を踏み出すだろうし、そんなきっかけから他人と関わるのが怖いから避けたいという「目的」を持つ人は、嫌な出来事をトラウマとして心の中に持ち続けてしまう。嫌な感情を持ち続けることによって「自分は努力したくてもトラウマのせいではない」と人間関係を避けるための言い訳をすることができるといわけだ。この青年の心理状態を自分に当てはめてみると、「きっと自分には、『変わる勇氣』が足りていなかったんだな」と気付ける。高校生の頃は思い通りにいなくてつらくて仕方ないことがたくさんあった。今は「自分は高校から新しい世界に足を踏み入れたのだから、自分をこの機会に変えなければ」と前向きに自分を少しずつ変えるという「目的」に沿って前向きに生きている。

では、「変わる勇氣」が出ないという人はどうすれば良いのだろうか。個人的な意見にはなるが、一つアドバイスを紹介しよう。それは、「できない」というつらさをたくさん経験することだ。自分が限界まで頑張ればできると思ったことができないということをたくさん経験すると、その分人は「うまくいかない」というストレスに耐性がついていき、できないことができるように自分を成長させたいという意欲がどんどん高まってくる。そのストレスに強い人ほど行動する勇氣が強くなってくるのだろう。「もし～だったらできるのに」とか、「～だからできない」とか言ってやればできる可能性を守りながら、「可能性のなかに生きている」ままではあなたの人生は何も変わらない。もしあなたが本当に変わりたいなら、どんなに小さなことでもいいから、ちょっと怖いけどやってみたいということをすぐにでも始めなければならない。そして、することを少しずつ大きくして、少しずつできないというストレスに耐える練習をしないとイケない。そんな心の強さを身に着けた先にあなたの成功が待っているのだと思う。あなたの人生は、「どんな条件だから」という「原因」で決まるのではなく、「どうなりたいか」という「目的」で決まるのだ。

（かけがわ ひなど）

世界から本が消えたなら

臨床心理学部 臨床心理学科 深層心理コース 1 回生 嶋田 響

「突然ですが、私は明日死にます。ただし悪魔との取引で、この世から物を1つ消す事に同意すれば私の命を1日延ばすことが出来るので、『本』を消すことに同意したいと思います」

いきなり無茶苦茶な序文になりましたが、今回私は「世界から猫が消えたなら」川村元気著（マガジンハウス 2012）という作品について紹介したいと思います（どちらかと言えば一方的に語ることになるかもしれませんが）。

「世界から猫が消えたなら」という作品を知っていますか？著者である川村元気は、皆さんご存じ、新海誠監督作の「君の名は。」等のプロデューサーを務めていたりします。私がこの作品に出会ったのは小学6年生くらいのときだったと思います。図書館に入り浸っていた私は新刊コーナーにあったこの本を借り、この本から感じる世界に惹かれました。実際、友達の誕生日プレゼントにこの本を渡すくらいには（喜んでくれていたのかな…）。

この本の面白いところは、1冊の本から全く違う角度のメッセージを感じるところかなと思います。

道草はこのくらいにして…冒頭の茶番がこの物語の一部なのですが、主人公はある時、がんによって先が長くないということを医者に告げられます。家に帰るとおかしな格好をした悪魔がおり、「明日あなたは死ぬのだ」と告げられる。だが悪魔といえども人の心はあり（本当に善意なのかは本編で）、「この世から1つ物を消すことに同意すれば、あなたの命を1日延ばしましょう」という取引を持ち掛けられます。

ここからが重要なんです。消すものというのは悪魔がその場の直感で選んだものであり、「蚊を消してほしい！」とか「Gを消してほしい！」などといったわがままは聞いてくれやしません（ケチ！）。

この本の内容に関して、私はすごくいいなあと感じる話（価値観？）があります。

「何かを得るためには、何かを失わなくてはね」

主人公の母の言葉です。

本編を読めばこの気持ちを共有できると思うのですが、この言葉が作品を通して深く心に突き刺さってきます。この言葉からも分かるように、作品の価値観として、「この世界は等価交換である」（あっ、これハガレンで見た！）ということや、「何かを得るためには何かを失わなければならない」（あっ、これ進撃の巨人で見た！）というものがあります。

そしてこの言葉に関して、私は1つ感じたことがあります。

「1つ目に消すことになったもの。その発明は人々からあるものを奪ったと同時に人々に与えたものもあった」ということです。

作品を通して、「得るために失う」ということが強調されています。ですが私は「何かを得るために何かを失わなければならない」と同様に、「何かを失ったと考えた時、同時に得たものも必ずある」ということなのではないかと思っています。

さて、2つ目・3つ目に消すことになったものからも、ものすごいメッセージを感じるのでそこまで語りたいたいという思いは強いのですが、2つ目からは更に長い話になってしまうのでまた次の機会に語る事が出来たらなと思います。

ここまでの文の構成は、この作品が遺書である（2周すれば分かるよ!）ということから語り口調で進めているので、そちらに則りました。普段の私はこんな感じではないと思います（ないよね!?!）。

最後に。

あなたの命が「本」と引き換えに1日延びるとしたら、あなたは どうしますか？

本というものが与えてくれているものは計り知れないものです。ですが、本をこの世から消すことによって得られるものもきっとあります。その天秤を一度考えてみてください。

（しまだ ひびき）

❀❀❀ 私のすすめる3冊（私の推薦図書） ❀❀❀

こども教育学部・准教授（国語科教育） 鷺 飼 洋 子

◎ 「国語授業の「個別最適な学び」と「協働的な学び」」

水戸部修治 著 明治図書 2023

子どもたちが自立的に学ぶ姿は、一定程度の長い時間が確保されるなかで、徐々に学びの質を高めていくことによって実現するとし、これを「ロングレンジの学習活動」と筆者は呼んでいます。この学びは、教師の緻密な手立てによって実現します。中教審答申において提言された「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現する授業づくりそのものです。そのヒントが随所にちりばめられています。昨年度まで私が赴任していた朱雀第七小学校の実践も紹介されています。

◎ 「個別最適な学びと協働的な学び」

奈須正裕 著 東洋館出版社 2021

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」において提起された「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は、どうすれば実現するのか。授業改善の必要性が叫ばれてから久しい。しかし、授業改善が十分進んでいるとは言えない状況をどう考えるのか。自立的に学び進める子どもの姿が見られたとき、教師が果たすべき役割や存在意義は何なのか問われる。この本の実践を読みながら、自らに問い直してほしいと思う。

◎ 「デルトラ・クエスト」(全8巻)

エミリー・ロッド 作 岡田好恵 訳 岩崎書店 2002

王家に伝わる7つの宝石が、影の大王に奪われた。デルトラ王国を救うために1枚の地図を頼りに、少年が冒険の旅に出ます。あなたにとって、王といえば、どんなイメージですか。ここデルトラ王国の王になったエンドンと、その友達ジャードが、国を守るためにとった行動は何だろう。そして、年月が過ぎ、いよいよ冒険の旅が始まります。ドキドキが止まらない展開で、8巻もあるけど、どんどん読みすすめることができます。ずいぶん前ですが、必死で読んだことを今でも覚えています。

(うかい ようこ)